

伸び伸びといふこと

この頃、“詰込み教育”の反動で、しきりに「伸び伸びとした教育」といふ言葉が口にされる。然し、それは、生後の三年間の教育が立派に行はれた上の事でなければならぬと思ふ。

生後の三年間、十分な“言葉の教育”が行はれてゐれば、あとは放つて置いても、子供は自分の能力を“伸び伸び”と発揮して、^{ひとかど}一簾の人物になれることは疑ひない。

然し、初めから放つたらかしの“伸び伸び”では、狼少女カマラほどではないまでも、禽獣に近い人間になってしまう恐れがある。人間だけが育ての親によって立派にもなり低劣にもなる動物だからである。

ライオンの赤ちゃんは、羊が育てても人間が育ててもライオンになり、その本性を変へることが出来ない。羊の子をライオンが育てたとしても決してライオンにはならない。然し、狼に育てられた少女カマラは、人間よりも狼に近い人間になってしまったのである。

カマラを育てたシング牧師の記録によれば、四ん這ひで走り回り、食べ物を食べる時にも手を使はず、口で直接食ひついたと言ふ。昼は部屋の隅にうづくまって眠り、夜になると四ん這ひになって歩き回り、時々、狼の遠吠えをしたと言ふ。正に人間狼である。

このやうに、他の動物では育ての親が何であらうとも、その本性が歪められることなくライオンはライオンに、羊は羊に育つけれども、人間だけは、育ての親の影響を受けて、立派な人間にもなれるが、狼にもなつてしまふのである。つまり、人間だけが“教育”を必要とする唯一の動物であり、その“教育”を最も必要とする時期は「生後の三年間」であることが解る。

人間の赤ちゃんほど無力な者は無い。親が四六時中保護してやらなければ決して育たない。「生後の三年間」は親の保護が是非とも必要なのである。その三年間に、大脳の神経細胞のネットワークの大半が形成されるのである。だから、生後の三年間といふのは、肉体的にも精神的にも一生のうちで最も大事な時期である、といふことが出来ると思ふ。

高等動物ほど親の保護を必要とし、その期間が長い。高等動物ほど生む子の数が少ないから、親の保護が無ければ種族が絶える恐れがあるからである。魚などは卵を生み放しにして顧みないが、その代り、一度に何千何万となく生む。卵から^{ひな}孵った稚魚は、親の保護を受けずに自分の力で生きて行かなければならないが、成魚になれるのは何千何万のうち唯々二匹だけなのである。

今や、文明社会においては、一組の夫婦は二人の子供しか生まな

い。二人の子供を生んで二人とも成人に育て上げるだけの自信があるからである。然しながら、“育てる”とは肉体の事だけであってはならない。「人間としての心」「精神”を養ふことが無ければならないのである。

その基礎は、生後の三年間に、母親によって作られるべきだと私は思ふものである。人間の子供ほど無力なものはないけれども、それだからこそ愛情のある親の保護が必要なわけであり、親子の強い絆が生れるわけであって、この生後の三年間は“天与の賜物”だと私は思つてゐる。その“天与の賜物”を受ける第一の有資格者は、妊娠から分娩に至るまでの大事を担当した母親である。

ところが、この頃の母親の中には、これを“天与の賜物”と思ふどころか、厄介な仕事と思つてゐる者が少なからずゐるのは、一体どうした事であらうか。私は不思議に思ふと同時に寒心に耐へない。